

# 下田東遺跡出土の川原寺式軒瓦および平瓦の再検討

## 1 調査の経緯

香芝市下田東遺跡出土瓦には、川原寺創建瓦と「酷似」するものが含まれることが指摘されてきた<sup>1)</sup>。また、川原寺創建瓦には五條市荒坂瓦窯産（I群）、明日香村川原寺瓦窯産（II群）と異なる一群（III群）があり、その生産地として、下田東遺跡等の出土瓦および文献史料から、下田東遺跡を含む広瀬郡に川原寺創建期の瓦窯（「広瀬郡瓦窯（仮称）」）が想定された<sup>2)</sup>。下田東遺跡の報告書（以下、『下田東報告』と表記）では、「広瀬郡瓦窯（仮称）から製品供給先である川原寺への中継地ないし集積地としての機能を果たした可能性が考えられる」とされた<sup>3)</sup>。

このように、下田東遺跡出土瓦は、川原寺創建瓦の生産と供給の実態をあきらかにする上で重要な位置を占めるが、軒瓦の範や挽型、平瓦の叩き板といった工具のレベルまで同一か否か、といった具体的な点はあきらかにされてこなかった。そこで本稿では、下田東遺跡出土の川原寺式軒丸瓦・軒平瓦、斜格子叩き平瓦を取り上げ、それぞれ川原寺出土瓦との比較検討をおこなう。

今回の調査は、大阪府教育府文化財保護課の新尺雅弘氏が下田東遺跡および川原寺出土の瓦調査をおこない、下田東出土軒丸瓦が川原寺創建軒丸瓦601型式C種（以下、川原寺601Cと表記。他型式・種も同様）と同范と考えられること、軒平瓦、丸・平瓦のなかにもきわめてよく似た特徴をもつものがあることを確認したことが契機となっている。そこで、筆者と道上祥武（奈文研）が2024年6～7月に新尺氏とともに、奈文研所蔵の川原寺出土瓦を香芝市二上山博物館に持ち込み、実物照合をおこなった。本稿は、その成果の概要を筆者がまとめたものである。

## 2 出土瓦の検討

**下田東遺跡GM4** 『下田東報告』でGM4に分類された軒丸瓦（『下田東報告』第353図2179）は、文様の位置や凹凸のほか、多数生じた木目の浮き出しや薄い範傷の位置が川原寺601Cと一致し、同范であることが確実である（図81-1、82-1）。川原寺601Cは花谷浩氏、小谷徳彦氏

により5段階の範傷進行が確認されているが、本資料は木目の浮き出しや範傷の状態から、3段階以降であることは確実である<sup>4)</sup>。また、4段階の範傷およびそれを5段階に補修した痕跡が不明瞭なことから、3段階の可能性が考えられる。瓦当部の厚さは3.0cm程度（中房中央部付近で蓮子がない箇所を計測、以下同様）であるが、瓦当裏面下半部を欠くため、中凹みになるかどうかは不明である。したがって、金子裕之氏の分類による瓦当裏面が平坦で瓦当厚が薄いIII型（以下、金子III型と表記）になる可能性が考えられるものの、確定できない<sup>5)</sup>。

瓦当裏面上半に横ヘラケズリ、そこから接合部にかけ横ないし斜めヘラケズリを施す。丸瓦部先端付近の凹・凸・側面に縦キザミ、丸瓦部広端面に円弧に沿うキザミを施す。灰色（HueN4/）を呈し焼成は良好、硬質、胎土はやや粗で直径0.2～0.3cm以下の暗灰色・白色砂粒を少量、直径0.1cm以下の暗灰色・白色砂粒を多く含む。こうした製作技法や胎土・焼成・色調の特徴と一致した資料は、川原寺出土の川原寺601Cの3～5段階の資料のなかに認められる。

**下田東遺跡GM3** 『下田東報告』でGM3に分類された軒丸瓦（『下田東報告』第353図2178）は、文様や凹凸がわずかに不均等になった部分を含め、川原寺601Cと一致する（図81-2、82-2）。目立った範傷が認められない部分であるため確定できないが、川原寺601Cと同范とみてよい。範傷段階も特定しがたいが、弁端からその外側にかけての断面形状から、5段階の可能性が考えられる。瓦当部の厚さは2.5cm程度で金子III型である。瓦当裏面は横方向のケズリとみられる痕跡を残す。浅黄色（Hue10YR8/3）を呈し、焼成はやや良好、やや硬質、胎土はやや密で直径0.5cm程度の白色砂粒をごく少量、直径0.2～0.3cmの白色砂粒を少量、直径0.1cm以下の白色・灰色砂粒を多く含む。こうした製作技法や胎土・焼成・色調の特徴と一致した資料は、川原寺出土の川原寺601Cの3～5段階の資料のなかに認められる。

**下田東遺跡GH1・3～5** 『下田東報告』でGH1（『下田東報告』第355図2189）、GH3～5（同第355図2191～2193）に分類された四重弧文軒平瓦は、いずれも同一の挽型によるものであり、顎部の長さ・高さ、調整方法、胎土・調整・色調などの特徴もほぼ一致する。一方、GH2（『下田東報告』第355図2190）は川原寺651の各種、下田東遺跡

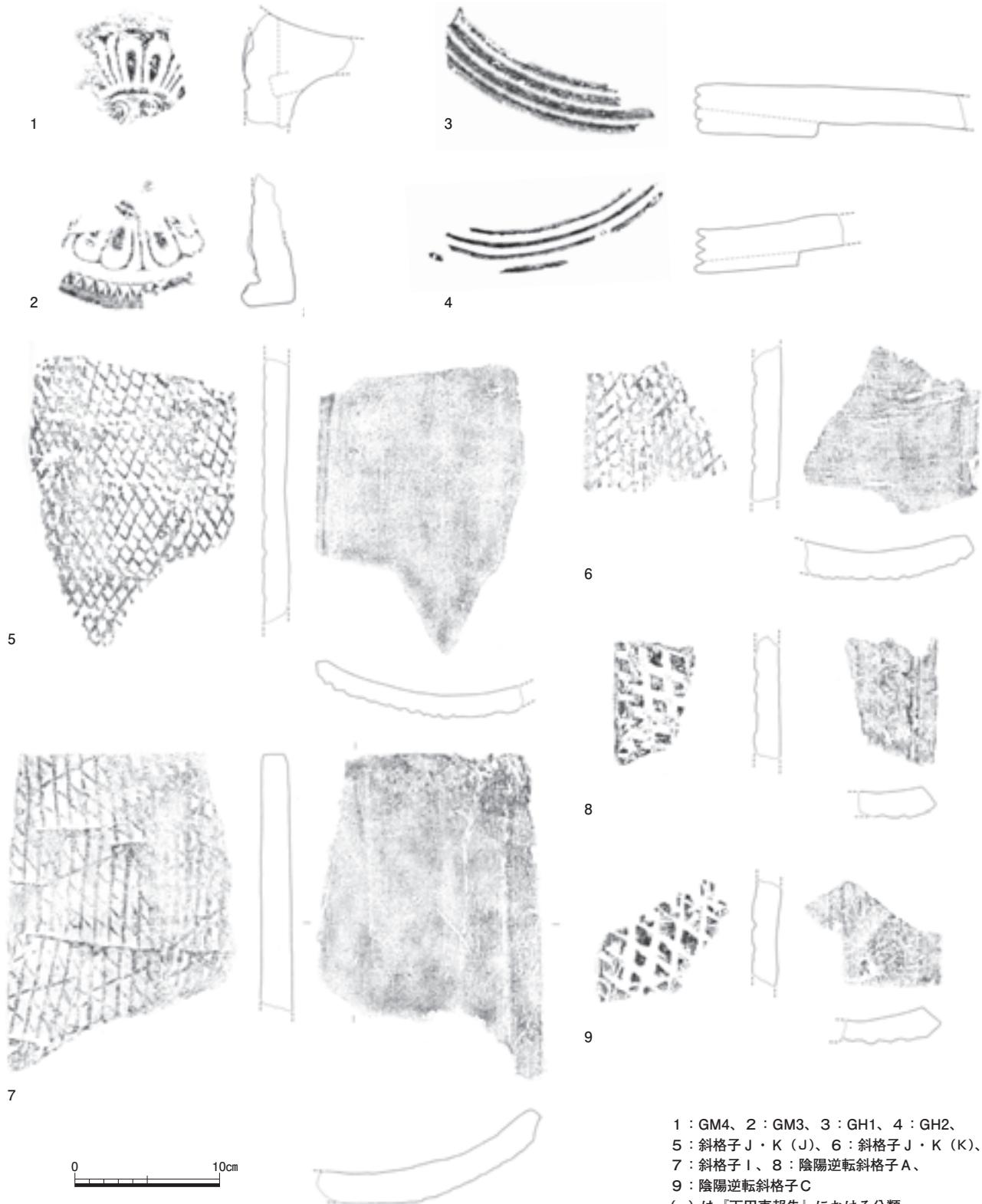


図81 下田東遺跡出土瓦 1:4 (香芝市・香芝市教育委員会2011より転載)

出土軒平瓦とも挽型が異なる。したがって、以下では、GH1の特徴を説明する。

GH1は、川原寺651Cとの酷似が指摘されてきた(図81-3、82-3)。しかし、今回の実物照合では、重弧文の幅、形状等の特徴が川原寺651型式の各種の標識的な資料と一致しないことを確認した<sup>6)</sup>。

額部の長さ(深さ)は8.3cm、段額の段の高さは0.9cm、

瓦当面・額部の厚さは3.5~3.7cm、平瓦部の厚さは2.7cm。額面、額裏面、平瓦部凸面に横ヘラケズリを施したのち、平瓦部凸面の額裏面と接する部分に幅0.7cm程度の横ナデツケによる浅い凹線をめぐらす(図82-5・6)。平瓦部凹面にはやや粗い横ナデを施し、凸面は横ヘラケズリを施して叩き目を残さない。瓦当側面は、平瓦部狭端側から瓦当部に向かってヘラ削りを施し剣先状に仕上げ

- 1: GM4、2: GM3、3: GH1、4: GH2、  
5: 斜格子J・K(J)、6: 斜格子J・K(K)、  
7: 斜格子I、8: 陰陽逆転斜格子A、  
9: 陰陽逆転斜格子C  
( )は『下田東報告』における分類

る。重弧文の円弧の内径を復元できるほど残りはよくないが、川原寺651A・Bよりあきらかに小さく、C～Eに近いもののCよりやや曲率が緩い。瓦当面と平瓦部凹面のなす角度はほぼ直角である。

胎土は密で直径0.2cm程度の黒色・白色砂粒を少量、直径0.1cm以下の白色・黒色砂粒をやや多く含む。色調は灰白色 (Hue7.5Y7/2)、焼成はごく良好で硬質。各部の法量、顎部や平瓦部の調整、胎土・焼成・色調の特徴は川原寺651Cと共に通する。

『川原寺発掘調査報告』における川原寺651型式の分類指標は、顎部の長さ7.0cmを境にそれ以下のA・Bとそれ以上のC・D・Eに大きく二分し、さらに5種に細分するものである<sup>7)</sup>。前者は重弧文の円弧内径平均が20.5cm、後者は15～16cm、側面のヘラケズリ方向は前者が瓦当部から平瓦部狭端方向へ、後者がその逆となることが指摘されている。さらに、花谷氏は各種の特徴をさらに明確にしており、顎部の長さからGH1・3～5は川原寺651C（顎部長8.0cm前後）と共に通する。また、顎部の長さ、段の高さ、円弧の内径、側面のヘラケズリ方向、胎土、焼成、色調の特徴のほか、平瓦部凹面の顎裏面と接する部分に横ナデツケによる浅い凹線をめぐらす特徴も川原寺651Cと共に通することから、下田東遺跡GH1と川原寺651Cは共通性が高いといえる。

**凸面斜格子叩き平瓦「斜格子J・K」** 『下田東報告』において斜格子JおよびKに分類された平瓦（『下田東報告』第367図2230、2228）は、いずれも叩き板が同一であるため、斜格子J・Kと表記する（図81-5・6、図82-7）。これらと同一の叩き板を用いた平瓦を、川原寺出土瓦の中に確認した（小谷氏による川原寺出土平瓦分類（以下、小谷分類と表記）の平瓦II B）<sup>8)</sup>。

格子目は細かく深く、叩き板の幅は6.0cm程度である。側面と凹面ないし凹凸両面との間に面取りを施す。胎土はやや粗く直径0.2cm以下の白色・黒色砂粒をごく少量、直径0.1cm以下の白色・灰色・茶色砂粒を多量に含む。『下田東報告』によれば15点出土。

**凸面斜格子叩き平瓦「斜格子I」** 『下田東報告』で斜格子Iに分類された平瓦（『下田東報告』第366図2226）と同一の叩き板を用いた平瓦を、川原寺出土瓦の中に確認した（小谷分類の平瓦II D）。叩き目は粗く浅い。叩き板の幅は7.5cm程度である（図81-7、82-8）。凹面に縦ナデを施すが、

一部、布压痕や枠板痕を残す。側面と凹面との間に面取りを施す。胎土はやや粗く、直径0.1cm程度の白色・灰色砂粒を多く含む。『下田東報告』によれば22点出土。

**凸面斜格子叩き平瓦「陰陽逆転斜格子A」** 『下田東報告』で陰陽逆転斜格子Aに分類された平瓦（『下田東報告』第367図2231）と同一の叩き板を用いた平瓦を、川原寺出土瓦の中に確認した。斜格子部分が突出し、その間の無文部が凹むという陰陽逆転の特徴をもち、斜格子の凹凸が緩い（図81-8、82-9）。叩き板原体幅は不明。

凹面全面に縦ナデを施し、布压痕が残らない。側面と凹・凸面との間に面取りを施す。胎土はやや粗く直径0.1cm以下の灰色・暗灰色砂粒を多量に含む。『下田東報告』によれば2点出土。

**凸面斜格子叩き平瓦「陰陽逆転斜格子C」** 『下田東報告』で陰陽逆転斜格子Cに分類された平瓦（『下田東報告』第367図2233）と同一の叩き板を用いた平瓦を、川原寺出土瓦の中に確認した（小谷分類の平瓦II C）。陰陽逆転の斜格子の凹凸が激しく、叩き板原体幅は4.3cm程度（図81-9、82-10）。

凹面に粗い斜めナデを施すが、布压痕が広く残る。側面と凸目との間に面取りを施す。胎土はやや粗く直径0.1cm以下の灰色・白色粒を多量に含む。『下田東報告』によれば1点出土。

**その他の下田東遺跡出土瓦** 本稿では工具の同一性に着目したため省略したが、下田東遺跡出土のこの他の斜格子叩き平瓦、凸面布目平瓦、丸瓦のなかに、川原寺出土瓦と形状や製作技法等の特徴が共通するものを確認した。

### 3 まとめ

以上の通り、下田東遺跡出土瓦の中には、複数の種類において、川原寺出土瓦と共に通した特徴をもつものがあることを確認できた。特に軒丸瓦の範、平瓦の叩き板という複数の工具の一一致を確認したことは、両者の関係を考える上で大きな成果である。『下田東報告』のとおり、下田東遺跡周辺に瓦葺きの施設が存在しないとすれば、川原寺創建瓦の生産・流通に関わる遺跡である可能性が高まったといえよう。今後、胎土分析も実施し、両遺跡出土瓦の関係の検討をより深めたい。

本稿はJSPS科研費JP20H01362による成果の一部である。  
(清野孝之)



1 : GM4、2 : GM3、3 : GH1、4 : GH2、5 : GH1顎面・平瓦部凸面の調整、6 : GH1平瓦部凹面・瓦当面・側面間の調整、  
7 : 斜格子J・K、8 : 斜格子I、9 : 陰陽逆転斜格子A、10 : 陰陽逆転斜格子C

図82 下田東遺跡出土瓦写真

#### 謝辞

調査に際しては、香芝市教育委員会文化財課の西垣遼一氏、乾将太朗氏に大変お世話になった。末筆ながら深甚の謝意を表したい。

#### 註

- 1) 小谷徳彦・筧和也「瓦磚類」『川原寺寺域北限の調査』奈文研、2004。花谷浩「飛鳥の川原寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅲ』奈文研、2009。小谷徳彦「川原寺の創建瓦」『古代瓦研究Ⅲ』奈文研、2009。香芝市・香芝市教育委員会『下田東遺跡』香芝市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集、2011など。
- 2) 註1 小谷・筧2004、註1 小谷2009。
- 3) 註1 香芝市・香芝市教育委員会2011、238頁。

4) 註1 花谷2009、註1 小谷2009。

5) 金子裕之「軒瓦製作技法に関する二、三の問題－川原寺の軒丸瓦を中心として－」『文化財論叢』1983。

6) 筆者は川原寺651型式の代表的な資料を確認したが、小片を含む全点を対象に検討できたわけではない。花谷氏は川原寺651Cの「弧線と弧線の間隔が少し広くなっているもの。凹面調整が雑なグループ」がGH1に似るとする(『古代瓦研究Ⅲ』奈文研、128頁、2009)。今回実物照合した川原寺651型式の標識的な資料以外に、GH1と文様が共通するものが存在することは現状では否定しがたい。

7) 奈文研『川原寺発掘調査報告』学報第9冊、1960。

8) 註1 小谷・筧2004、小谷徳彦「川原寺の丸・平瓦」『古代瓦研究Ⅲ』奈文研、2009。